

研究・調査報告書

報告書番号	担当
27	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Role of alcohol and smoking in diagnostic delay of head and neck cancer patients/ 飲酒・喫煙が頭頸部癌の診断遅延に及ぼす影響	
執筆者	
Brouha X, Tromp D, Hordijk GJ, Winnubst J, De Leeuw R.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Acta Otolaryngol. 2005;125(5):552-6.	
キーワード	
飲酒、診断遅延、頭頸部癌、喫煙、腫瘍ステージ	
要 旨	
<p><背景>頭頸部癌の発見遅延は診断時の腫瘍ステージ上昇に関与すると想定されるが、本研究では飲酒・喫煙習慣が頭頸部癌の診断遅延に及ぼす影響について検討した。</p> <p><方法>新規診断された427例の頭頸部癌症例の内研究参加に同意した306例を対象とした。内訳は口腔腫瘍134例(77%)；喉頭腫瘍117例(69%)；咽頭腫瘍55例(65%)。診断遅延とは腫瘍由来の症状初発日から初診までが30日を超える例とした。ステージT3を進行癌とした。飲酒習慣を以下の3群に分類した：軽度(0-2飲酒単位/日)；中等度(3-4飲酒単位/日)；高度(>4飲酒単位/日)[1飲酒単位はエタノール11.5g相当量。ビールなら350ml, ウイスキーなら30ml程度]。喫煙習慣を以下の4群に分類した：生涯喫煙習慣無し；中止した；軽度(0-20本/日)；高度(>20本/日)。</p> <p><結果>ロジット解析の結果軽度飲酒者に比べて高度飲酒者に診断遅延が有意に多かった[p = 0.04; オッズ比(OR) 1.8; 95%信頼区間(95% CI) 1.0-3.1]。軽度喫煙者は診断遅延傾向を示した(p = 0.06; OR 2.2; 95% CI 1.0-5.0)。高度飲酒者(p = 0.01; OR 2.0; 95% CI 1.2-3.6)と高度喫煙者(p = 0.03; OR 3.1; 95% CI 1.1-8.4)は共に診断時の腫瘍が有意に大きかった。</p> <p><結論>高度飲酒習慣は頭頸部癌の診断遅延を来し、診断時にはより大きな腫瘍になっているリスクであることが判明した。高度喫煙は診断時にはより大きな腫瘍になっているリスクであるが、診断遅延に対しては有意ではないがその傾向があることを示した。</p>	